卒業するにあたり、４年間を振り返る

動物応用科学科４年　倉田直幸

私もあと少しで卒業するということで、大学生活四年間を振り返ってみようと思います。しかし、一年生の頃や二年生の頃については、すでに記憶が朧げになってしまっているのに自分自身驚きました。それほど研究室で過ごした二年間が濃いものであったのだと再認識しています。それでもがんばって振り返ってみようかなと思います。

この大学に入ったのは、単純に動物という文字が学科に入っていたから、という単純な動機でした。動物は好きだったことに間違いはありませんが、正直に言うと、皆様のように積極的に「知りたい」という熱意には欠けていました。今思うと、非常にやる気や自主性に欠けた学生でした。遺伝学や繁殖学など、高校では全て「生物」に分類されるものが一週間の授業ほとんどを占めることができるのか、と妙な感心をしながら毎日を過ごしていました。残念ながらそれらに興味が持てず授業が終わったらすぐに遊びに行くか帰るか、という生活を一年半過ごしていました。しかし、風のうわさで野生動物学研究室が新設されたことを知ってから、「野生動物って面白そう」という理由で少しずつ興味を持ち始めました。本当に少しでしたが。金華山でのシカ調査にも興味をひかれたのですが、積極性に著しく欠ける自分にはハードルが高く、結局行けずじまいでした。その後鈴木君や山田君に話を聞いて激しく後悔したのを覚えています。勇気を振り絞って解剖には数回参加し、その面白さに衝撃を受けました。この大学のカリキュラムではなかなか触れることの出来ない「実物」がそこにあり、タヌキ一匹を一人に任せてもらえたというのが非常に意味が大きかったのではないかと思います。解剖が大きな後押しとなり、野生動物学研究室への入室を希望しました。入室試験の詳細メールが仲間内で自分にだけ届かず「不合格になってしまったのか…」と落胆したが、実は先生が忘れていただけだった、というエピソードも今では笑い話になりました。

めでたく野生動物学研究室に入ることができ、野生動物の研究をはじめられるようになりました。テレビで見てイメージしたものとは全く異なり、地道な作業であることを知りましたが、「これが本当の野生動物の調査なんだ」と自分が本物に触れられていることに感動し、調査を進めるうちにどんどん研究の世界に没頭していきました。今まで受け身の姿勢で物事に取り組んできたのですが、自分から求めるようになっていると実感しました。授業が五分延長されるだけで嫌悪感を抱いていたのですが、誰に言われるでもなく終電まで残っていたりすることがよくありました。勉強に嫌悪感を抱いていた自分が大学院に行くというのは非常に驚きです。

私はこの研究室に入って非常に内容の濃い、有意義な時間を過ごすことができました。これもひとえに先生方や室生の皆さまのおかげです。本当にお世話になりました。